

創刊にあたって

加藤文彦

2001年4月、京都女子大学大学院文学研究科の英文学専攻に博士後期課程が設置された。1959年に修士課程が発足してから42年を経てようやくここに高等教育機関として全課程が整備されたことになる。この機会に、後期課程の教育と研究活動の成果を公表する機関誌として本誌が創刊されることとなった。先人のご努力と学園の後援に深く思いをいたし、新しい伝統の礎をここに据えることができたことを皆さんと共に喜びたい。多方面にわたって多くの方々のご尽力がなければ成らなかった事業であり、お一人一人お名前はあげられないが、お世話になった方々にこの場を借りて深甚の感謝と敬意を表するものである。

英文学専攻とは名ばかりで、内実は文体論、英語学、英文学、米文学、英米演劇論、比較文学、英米文化論、記号論、英米言語思想、英米文学理論、英語教育理論というふうに、多彩な研究・教育領域を包摂している。広義の意味における英米文化の研究を主眼とするが、この領域における研究の方法とその成果は、過去四半世紀の間に地殻変動にも譬えるべき大きな変動を経て、今世紀の幕開けとともに新しい時代の緒に就いたばかりである。したがって、すべての研究者が画期的という形容にふさわしい偉業を達成する可能性を与えられている。

可能性とはまた使命のことでもある。果たさなければならない使命は尊く重い。かつてこの国には「女子大生亡国論」なる暴論が流布した時代があった。時は移り、今では「女子大生」ということば自体が差別用語であるという自覚がなければこの国の高等教育はその存在意義を失う。そのような時代にあって本誌の母胎は女子に支えられた大学院にある。このことの功罪は歴史の裁きに委ねるしかないが、今女性の力が世界を変えなければ、早晚この

世界は滅びるしかないというところまで来ている。特にこの国は昔も今も女性に依存しながら表向きその正反対の体裁を繕ってきた。滅びの方向に突き進んできたという意味では世界の最先端にある。手近の課題を解決することを積み重ね、少しでも現状を打開し、新しい価値の確立へとこの国を導くことが本誌に関わる者すべてに課せられた一つの重要な使命となる所以である。われわれがめざす英米文化の研究は、単に英米文化の研究に終わらせるわけにはゆかないのである。

だが本誌を取り巻く内外の状況はきわめて厳しい。すべての研究機関と研究者集団の後ろに大きく口を開いて待つ淘汰の地獄。立ち止まってしまえば、それに飲み込まれるしかない。新設の博士後期課程ももちろん例外ではない。数十年後、われわれの専攻がどのような運命をたどっているのか——この論文集が少なくともこの国において端倪すべからざる存在になっているか否かが、この専攻の命運を左右すると思って間違いないだろう。新しい価値の確立——それが単に多くの女性を含む関係者だけの問題でないことだけは確かである。

このような意味で、本誌の存在が「機会」というよりはむしろ一つの「挑戦」であることを願っている。この願いを実質的なものにするために、最高度の学識経験を備えた複数の碩学を学外審査員にお招きし、査読の公共性と審査の妥当性に万全を期した。いまは専攻関係者に限定されている執筆の門戸も、将来より開かれた方向をめざすことになるだろう。

関係諸賢のたゆみない研鑽と切磋琢磨に俟つところの大きさは推して測るべし。願わくは、本誌が江湖の暖かいご支援、ご批判を得て、混迷を深める時代の水先を照らす新しい灯台とならんことを。

2002年2月

文学研究科英文学専攻大学院委員